

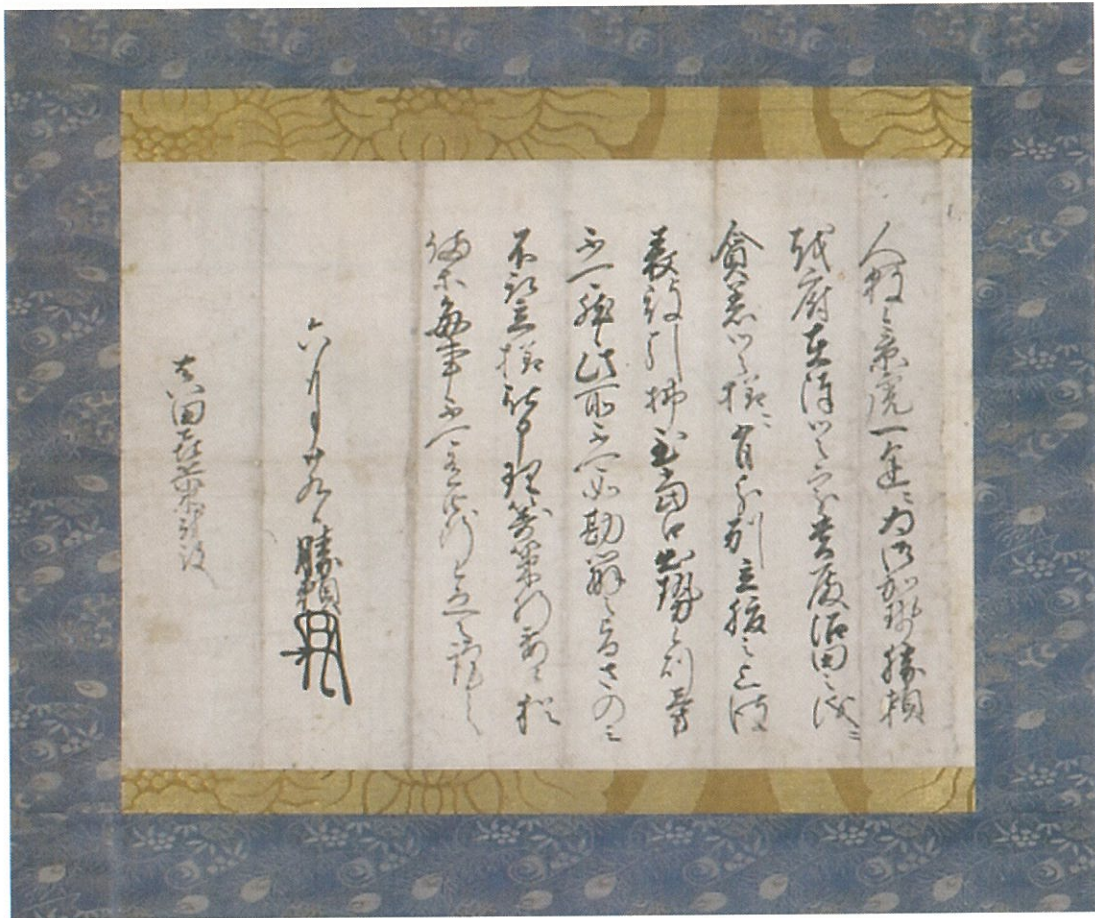
同じく伝来した拓本

寄託資料

鉄鍬形 国重要文化財 (2011D0006)

長野市若穂保科に所在する清水寺に伝来しました。鍬形とは、兜くわがたの前面につける立物たてもののうち、眉庇まびしのううえに角つののようにつける金属の飾り物です。この鍬形の制作年代は、製作技法から判断して、12世紀と考えられており、国内最古級の作例とされています。

鍬形下部の鍬形台には、金属板を切ってはめ込む象嵌ぞうがん装飾が施されています。象嵌はほとんどが脱落していますが、当初は雲竜文の象嵌であったことがわかります。



購入資料 武田勝頼書状 (2011C0008)

真田喜兵衛尉（昌幸）宛の武田勝頼書状。六月二十九日付で年記を欠きます。

本文の読みは次のとおりです。

（前欠）人数候。景虎一途ニ為御加勢、勝頼越府在陣候之处、貴殿沼田之儀ニ貪着候之様ニ有分別、立腹之上彼表被引払、至当口出勢候、則旁不可然候、此所不可如勘辨之旨、さのミ不取立様被申理、籌策肝要候、猶、備等毎事不可有由断候、恐々謹言

六月二十九日 勝頼（花押）
真田喜兵衛尉殿

この文書で注目すべきは、上杉景虎の加勢のために武田勝頼が越後府中に在陣したと言っているところです。このことから、この文書は天正六年（1578）に起こった御館^{おだて}の乱に関係するものであることがわかります。

天正六年三月に上杉謙信は死去します。謙信の後継者として名乗りを上げたのは、北条氏政の実弟である景虎と、謙信の姉の子・景勝でした。両者の争いは越後の国人たちを二分するものとな

りました。これを御館の乱とよびます。御館の乱は天正七年に景虎が鯨ヶ尾城（群馬県沼田市）で自害することで終わりますが、この文書は御館の乱における真田昌幸の動きが見て取れるということで重要です。

昌幸はこのころ沼田城の攻略に心血を注いでいました。このさなか、武田勝頼は上杉景勝側との同盟（甲越同盟）を結び、沼田の地は武田方の支配として認めることとなったのです。昌幸としては、この措置を不服としていたことが、この文書から明らかとなります。（笹本正治『真田氏三代』ミネルヴァ書房 2009年）

本来であれば、松代藩・真田家に伝えられるべき文書ですが、早い時期から真田家には伝来していなかったと思われます。なお、同年九月十日付の真田喜兵衛尉あて武田勝頼書状が真田宝物館に伝わりますが、これは江戸時代の終わり頃に家臣から寄進を受けたもので、本資料と同じく掛軸に仕立てられています。なお、この装丁は、真田家に伝わる文書群とは性格を異にするものであることを付言しておきます。



寄託資料 熊野観心十界曼荼羅 (2011D0004)

熊野観心十界曼荼羅とは、熊野三山の宗教者が用いたとされる宗教画です。画面中央に「心」の一文字を配置し、周囲に四聖（声聞、縁覚、菩薩、仏）と六道（天、人間、地獄、餓鬼、修羅、畜生）を描いています。「心」は曼荼羅を見る人の心を表わし、日頃の心がけ次第で天上に行くこともできれば、地獄に落ちることもあると説きます。

本資料は、長野県内に唯一現存が確認されている熊野観心十界曼荼羅です。長野市篠ノ井東横田公民館（旧十王堂）の所蔵ですが、本年度当館にご寄託いただきました。当初は掛軸の装丁でしたが、現在は額装となっています。額の裏には修理をした際に残したと思われる掛軸の裏書があり、それには天保11年に奉納、明治45年に再彩色したことが記されています。



寄贈資料 木造大日如来坐像 長野市指定文化財（2011A0007）

長野市若槻に所在する円龍寺の本尊です。円龍寺は、長野市の北部、飯綱町との境にある三登山のふもとの谷の奥にあった寺です。いまは曹洞宗に属しますが、古くは密教の寺院であったといわれています。本像が金剛界大日如来であることもそれを物語っています。

本像は像高が95 cmです。一木造りで体部を内刳りし、背の中央から地付きまでを矧ぎ付けるほかは、宝冠・天冠台・臂釦など、ともに一木から掘り出しており、彫眼で古様を残しています。

頬張りが大きく、胴部は細長く、また膝張りが大きく高いのが印象的です。彫り口が比較的浅くおおまかなところなど、鎌倉時代末から室町時代にかかるものではないかと思われます。

博物館常設展示室2階の「慈悲のまなざし」コーナーで展示しています。

本年度受け入れたその他の資料

1. 寄贈資料

- (1) 善光寺・戸隠信仰関連資料（2011A0006）
- (2) 稚児衣装（2011A0002）
- (3) 太子講道具（2011A0004）

2. 寄託資料

- (1) 西条村絵図（2011D0005）

3. 購入資料

- (1) 従金沢至江戸下道中絵図（2011C0001）
- (2) 永禄四年九月四日
川中島の合戦山本勘介入道討死の図
（2011C0002）
- (3) 信濃国宿駅略図（2011C0003）
- (4) 信濃国絵図（2011C0004）
- (5) 新版金沢道中双六（2011C0005）
- (6) 直江山城守兼続 鬼小島弥太郎（2011C0006）
- (7) 白澤避怪図（2011C0007）

長野市にかつてアシカがいた！

アシカ科動物の臼歯化石を発見！戸隠の約 350 万年前の地層から

今年度、戸隠地質化石博物館ではこれまでに収集した地質関係の収蔵資料・標本の整理作業を続けています。その中で、小さくても大きな発見がありました。

2月10日（金）、裾花川の地層から採取した貝化石の標本整理をしていた職員が、廃棄予定の岩石片の中に、明らかに貝化石とは別物の1mm程度のキラッと光るものを見つけました。「なんだろう？」と思いながら、針でつついて周囲の砂粒を取り除いていくと、だんだんと形が現われてきました。「これは何かの歯だ」と期待がふくらんでいきます。そして15分後！全体の形があらわれました。高さ7mmの円錐状の形の歯化石を無事に掘りだすことができました。残念ながら歯根部はありませんでしたが、エナメル質の部分（歯冠部）がほぼ残った化石です。



（発見された歯の化石）

「やったー、アシカの仲間の奥歯（臼歯）だ」と、思わず万歳しました。この本物に出会えた感動は博物館職員の醍醐味でもあります。なぜ、アシカの仲間の臼歯だとすぐわかるのかと言いますと、長年いろいろな動物の骨や歯を集め、見比べてきたからです。

アシカの仲間は陸上に暮らしていた動物が海へ戻り、手足がヒレになったグループ（ヒメノミ鰭脚類）です。鰭脚類は骨や歯の形によって、大きくアシカ・アザラシ・セイウチに分類されます。アシカの仲間の食事風景を動物園で見た方もいると思いますが、アシカは、魚やイカ類を丸のみにしています。歯はかみ砕いたり、すりつぶすためではなく、エ

サを捕まえるためのものとなっています。そのため臼歯はみんな単純な円錐形をしているのが特徴です。あらためて館にあるアシカ科の動物（カリフォルニアアシカ・トド・オットセイ）の歯と比べてみると、大きさや形の特徴がオットセイ（♀約1歳）の右下顎の臼歯ととても良く似ていました。



（オットセイ♀の臼歯との比較）

アシカ科と思われる歯の化石は、戸隠から1989年に犬歯（牙）、1993年に臼歯の化石が発見されています。長野市としては今回が初の発見となりました。絶滅したニホンアシカの歯の可能性もあるので、それとの比較が今後の課題となっています。約400万～300万年前、日本海が長野市西部まで広がり、寒流によってアシカの仲間が回遊してきた証拠です。当時の環境を探る上で、貴重な資料となりました。（田辺智隆）



（オットセイ頭骨の画像）

新着資料紹介

動物の頭

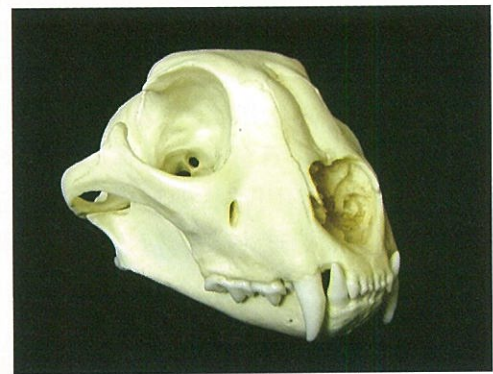
戸隠地質化石博物館には、今生きている動物たちのホネの資料がたくさんあります。なぜなら、昔（化石）を知るためには、今（骨）を知る必要があるからです。日頃からこうした資料をよく眺めてニヤニヤ（＾＾；）しています。

今回はその中から新着資料を2つご紹介します。どちらもレプリカですが、ずーっと欲しかった資料の1つです。



大きさ（長さ×幅×高さ）30cm×20cm×25cmで、同じ仲間のものから比べるとずいぶん小さく、かつてはその大きい方の突然変異したものとして認められたのは結構最近のことなのです。写真を見ると大きな牙が特徴的です。奥歯（臼歯）もけっこうギザギザしています。でも、普段は水の中で生活していて、岸辺の

イネ科植物を中心にたべる草食動物です。答えはPygmy Hippopotamus、コビトカバです。国際自然保護協会（ICUN）の絶滅危惧種に指定され、ワシントン条約の付属書IIの扱いを受ける貴重な生き物です。



次は大きさ18cm×12cm×10cmで、同じ仲間のものと比べて、体の大きさのわりに頭は小さい印象を受けます。同じ仲間は全体的にまるいのに、これは自転車レースで見るヘルメットのように後頭部が平な形をしています。歯は食肉目の動物らしい形をしています。そうです。こいつは肉食動物です。狩りをするときの武器は、スピードです。世界一のスピードで獲物を追いかけて、鋭い爪で引っ掛けて獲物を転ばせて、キバでどの元を咬みとどめをさします。

答えはCheetah、チーターです。群れを作らないネコ科の動物としては珍しく、飼いならされて狩猟につかわれていたりもしたそうです。古くはエジプト（紀元前1700年ごろ）の王様に贈られた記録（絵）もあるとか。やはりICUNの危急種に指定され、ワシントン条約の付属書Iの扱いを受ける生き物です。どちらの動物も人が関わったことで減少している生き物です。

他にもたくさんの骨が通称“骨部屋”に収蔵されています。紹介しきれませんので、もし興味をもったら戸隠地質化石博物館（026-252-2228）までご連絡ください。（古賀和人）

信州新町博物館

信州新町博物館（信州新町美術館・化石博物館）で平成23年度に寄贈を受けて、新たに収蔵した作品・資料をご紹介します。

辻村八五郎氏の作品を受領

辻村八五郎は大正3年東京生まれ、東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業されました。昭和19年に長野市に疎開し、昭和44年に浦和市（現在さいたま市）に転居するまでの25年間を長野で生活し、洋画の制作活動が続け、日展・光風会展に出品して数々の入賞を果たし、この間日展の審査を行うなど指導者としても活躍しました。

県の美術界にも大きな影響を与え、信州美術会理事や県展の審査員を歴任し、後継の育成にも尽力しました。日展や光風会の要職を務め、平成2年に第22回日展で内閣総理大臣賞を受賞し、平成8年は勲四等瑞宝章を受章。平成15年に逝去されました。

今回、ご遺族の方から長野市とも縁が深いので寄贈したい旨の申し出があり、120号や100号の裸婦作品を始め、15点のまとまった油彩画作品を寄贈していただきました。

この中には戦後昭和22年の長野市の雰囲気がわかる貴重な作品もあり、今後展覧会を通して市民の皆さんに紹介していく予定です。（瀧澤一彦）



写真1「宿舎前 ジープ」 F4号



写真2「油絵を描く男」 F4号



写真3「女と犬」第55回光風会展（1969）出品作品 P80号

信州新町化石博物館では、2011信州新町イヤーを記念して、太古のクジラ発見プロジェクトや長野市周辺から見つかったクジラ化石展を開催いたしました。この展示の準備を進める際に、信州新町周辺で発見されたクジラ化石を寄贈していただきました。

ヒゲクジラ類下顎骨

この化石は、約45年前に犀川沿いの工事現場で発見されたもので、ヒゲクジラ類の下顎骨の他にも肋骨の破片なども含まれています。発見当時は肋骨や背骨も見えていたそうです。

約600万年前の地層から発見されたものですが、破片が多い中でジグソーパズルのように組み立てを進め、館内に展示しております。さらに骨の破片を組み合わせる必要があります、現在のところではヒゲクジラの仲間である以上に、細かな種類まではわかりません。



写真4「ヒゲクジラ類の下顎骨」

マグロ属の化石

この標本は、長野市立博物館紀要第13号に掲載される論文の標本です。著者の一人である小池伯一さんが安曇野市豊科の約1300万年前頃の地層から採集された魚類化石で、マグロ属の上顎と歯骨（下顎の骨）です。この産地では、ソコダラ、ハダカイワシ、サバ、サワラ、カマス等の化石も見つかっています。

顎の骨の特徴からマグロ属と考えられ、日本ではマグロ属の化石が見つかっていないようです。このことは、フォッサマグナ地域の魚類化石として貴重な標本であるとともに、国内でこれから発見されるマグロ属化石の重要な比較研究資料となっていくと思います。(成田健)



写真5

「マグロ属化石 右側面」上顎の歯が見えています。



写真6

「マグロ属化石 左側面」歯骨（下顎）の歯が並んでいるのが見えます。

大江文雄・小池伯一（2012）、安曇野市豊科田沢中谷の中新統別所累層から産出したマグロ（*Thunnus* sp.）の顎骨・長野市立博物館紀要第13号

【博物館のホームページアドレス】

<http://www.city.nagano.jp/museum/index.html>

◆長野市立博物館	〒381-2212 長野市小島田1414	☎026(284)9011
◆戸隠地質化石博物館	〒381-4101 長野市戸隠板原3400	☎026(252)2228
◆鬼無里ふるさと資料館	〒381-4301 長野市鬼無里和田沖・国道406号線沿い	☎026(256)3270
◆信州新町美術館・有田生馬記念館・信州新町化石博物館	〒381-2404 長野市信州新町上条88-3	☎026(262)3500
◆ミューゼ蔵	〒381-2405 長野市信州新町新町37-1	☎026(262)2500